

## 私の想う長崎の町

上田 夏子

近頃はバスや電車に乗ると、若いOLや女子高生が車中でお化粧を始めたたり、中年の親父もどきに足をドックと広げて座つてたりという姿をよく見かけます。又、街中では処構わず地べたに座りこんでタム口している男の子がいます。こういう現象は何も長崎だけではなく、全国的な一つの流行？みたいなものらしいのですが、それにしても恥じらいとか、デリカシイとかいうものは無いのだろうか？とみていると、「何よオバサン！」ときつい目で見返えされてしまい、ついあたふたとしてしまいます。

「今ごろの若いもんは…」と言うようになったら歳をとった証拠らしく、かつて私もその歳のころは陰でそういわれてきた事も多々あったのだろうかと考えると、「偉そうな事は言えないかな」と思いながらも、やはりカッコワルイとしかどうしても見えない現象ですね。

私は戦後の世代に生まれました。幸いにも戦中の苦しさや、戦後の混乱にも遭いませんでしたが、戦争を生で経験し、焼野ヶ原から立ち上がって、今の日本・長崎を再生してこられた力強い大人の人たちを見て育ってきました。

幼い頃は今のようにより便利で物の豊かな時代ではまだありませんでしたが、振り返ればそれが懐かしい思い出になっている事がたくさんあります。例えば、テレビというものの出初めは、近所のハイカラな家に見に行ったもの



昭和2年・長崎くんち 本籠町奉納龍踊り

しい価値観、美意識、品性などが消えていってしまっているものがありはしないだろうかと考えさせられるのです。

私の祖母は平成元年八十九歳で亡くなりました。叔父の家に同居しておりましたが、部屋には筆筒一本に遺品がきちんと纏められており、残された日記帳には誰も知らなかったガンの自覚症状が記してありました。亡くなるまでに十日程の入院生活で家族は代わるがわる別れに行くことができました。叔父は「看取る者たちの満足まで考えて逝った、お母さんやった」と話してくれました。

またあるTV番組をみていた時のことですが、それは長崎の葉山にあるグルーブホームで生活するお年寄りのドキュメントがあっていました。痴呆の進んだおばあさんでしたが、ヘルパーさんと手をつないで散歩から帰ってこられた時の様子です、ヘルパーさんはただいまと玄関からトントンと先が上がっていかれました。するとそのおばあさんは、ひらりと振り向いて自分の脱いだ靴を腰を落として玄関の上がり口の隅にそつと寄せられたのです。その姿がとてもきれいで、昔から身についた仕事草なんだなあと感動してしまいました。どちらも特別ではない普通のお年寄りの話ですが、普通の生活の中に蓄積された「当たり前」の「らしさ」が出ただけのことだったと思います。

今は私たちの世代でも核家族化が進み、その子や孫達になるとふだんからお年寄りと密に接する機会がなくなりつつありますが、それがじわじわと及ぼす影響はと考えると、少なくとも和む安心やこころ豊かな情景が想像つきにくくなってしまつたのです。

私たちを育ててくれた親やその先祖の、きびしい時代を強く生き抜いてきた気概や思いの深さを知る時、先に進むスピードはしばしば緩めて、「温故知新」代々つながっていく血の流れを尊びながら、大事に伝えていく我が家の文化、地域の文化、長崎らしい精神を真剣に受け継いで次の世代へ渡していく役割が、私達の世代にあるのではないだろうか、つくづく想うようになってきた今日このごろです。

(長崎ふみの会)

で、デイズニアーワールとか力道山のプロレスとか人気の番組には、向こう三軒両隣の子どもたちがどやどやと押しかけて、それでもそのおばさんはニコニコとしておられ、三菱造船に行っておられたおじさんは無口で恐そうだったけれど黙ってチャンネルを合わせてくださいました。また年末になると、町内の餅つきが総動員で行われ、朝まだ暗いうちから始まり、べったんべったんという音で目が覚め、母が白い割烹着の紐を結びながら釜焚きに出ていく光景は、幼ころにお正月を迎える嬉しさに、わくわくしたものでした。

あの頃はどこのお家も子ども専用の部屋なんて無く、一つの電灯の下で家族みんなが集まって食卓を囲み、お茶を飲み、一家の「なごみ」がありました。父親は給料日には今のようには明細書の紙切れではなく、その家なりの厚みのある封筒を持ち帰り、その日の夕食の父親のおかずは子どもには入らない特別の一品があり、それがまたお父さんは偉いんだという印象を与えていました。

母親は今のようにはポタン一つでなんでもOKの時代ではなかったもので、家事に費やす時間も長く、それだけに子どもには生活に根ざした賤やコミュニケーションがしぜんとなされていたような気がします。

それらがじつは教育であり、これまでずっと伝えられてきたその家なりの家風であり、また当たり前前の日本人らしい考え方や、動き方を見せたいのだと思います。

そう考えると、高度成長の波に乗ってどんどんと文明の器が発達し、便利で楽で物は豊かになり、それが幸せになるような気がしていた事は本当にそれでよかつたのだろうか、時々立ち止まって考えてしまうような出来事がでてきたように思います。最近、私は便利で合理的で、新しいものより、もっと大事にしないといけない古き善きこと、日本人ら

### 風信

先月発刊した「ながさぎの空・第十六集」の巻末に収録した唐船抜荷の古文書「唐船燐記」、福岡県史編纂委員八百啓介先生、唐船研究で有名な流山市在住の山形炊也先生など各方面の専門家の人達より御高評をいただき、歴史協古文書会の人達においに喜んでおられる。

長崎県美術館が出島・常盤地区の海岸につくられた「水辺の森公園」内に四月二十三日開館される。私は所用もあつて先週、内部を見せて戴いた。そして其処には行きとどいた美しい建物があった。その内容については県の藤泉課長が「長崎経済研究所」の機関紙「ながさぎ経済3月号」に詳しく記しておられる。私は電車を市民病院前で降り、海への公園内をゆっくりと5分間あるき其の美術館について。

先日、私は新しく長崎市として発足される地域の文化財担当の委員さん方とお会いし、各地域のすばらしい文化財のお話をおききました。野母・三和町の委員より、昔、長崎の人は一生に一度は「みさき道」を歩いて御崎の御観音様に行ったのだと言つ、「その道は、今もありますよ」と言われる。その他、外海のキリシタン遺跡、伊王島の洋風建築、高島のグラバー氏と石炭物語、香焼の唐船遺跡などなど。是非その史跡めぐりを企画して下さいと、協会の皆さんよりも注文がきています。

毎月・月曜日の午前十時半より十二時まで開催してきた本会の長崎学講座四月四日(月)の講座で百十一回になりますよと事務局の上田さんは言つ。驚きましたね。

長崎文献社より、ブライアンさんが多年世界各地より集められた明治期より昭和初年にかけて、長崎で土産用として製作された彩色絵葉書約六〇〇枚をきちんと整理され、それに丁寧な解説文も添えられ発刊された「華の長崎」をいただいた。どれを見ても私達には懐かしいものばかりであった。

(長崎文献社刊・二二六P・五、八〇〇円)

